

査読論文

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の量的可視化の試み： 時間見本法を用いた検討^(注1)

吉澤英里・藪田弘美・前川真姫

要旨

本研究は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」の可視化を目的に、認可保育園と森のようちえん(各1園)における5歳児の自由遊びを時間見本法で観察・記録し、各姿の表出傾向を量的に比較した。結果、保育環境や活動内容により顕著に観察される「10の姿」に違いがあり、認可保育園では「協同性」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」が多く、構造化された環境が社会的・認知的発達を促す可能性が示された。森のようちえんでは「自然との関わり・生命尊重」「健康な心と体」が顕著で、身体的・感覚的な姿が観察された。さらに、評価者間での認識の差も確認され、「10の姿」への理解や視点の違いが表出傾向に影響することが示唆された。これらの結果は、保育者間の共通理解形成や省察、保幼小接続における教育的連続性の検討における手がかりとなり、また、今後の保育実践や評価手法の改善を考察する際の一助となるだろう。

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、認可保育園、森のようちえん、時間見本法、量的可視化

1. 問題

本研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下、10の姿)の可視化を目指し、認可保育園と森のようちえんという異なる保育環境における子どもの活動を時間見本法で量的に分析・比較することで、各「10の姿」の表出傾向と保育環境との関連を探索的に検討する。

日本では、平成29年に改訂(定)された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のいずれかに基づいた幼児教育・保育が実施されている(文部科学省他, 2017)。この改訂(定)のポイントとして、幼児教育と小学校以降の教育を貫く柱を明確にしたことが挙げられる。無藤(2018)によると、乳児から

18歳までさらにその先へ成長していく「力」の柱部分は「資質・能力」と呼ばれ、この資質・能力で、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力が表される。

さらに、この「資質・能力」の具体的な視点や目標像として、3法令に共通の「10の姿」が示された。「10の姿」は、これまでの5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)に基づく活動を通して育まれる力を、小学校入学時の子どもの姿として具体的に表したものであり、保育者が幼児教育・保育を行う際の手立てとなる(文部科学省他, 2017)。具体的には、(1)健康な心と体、(2)自立心、(3)協同性、(4)道徳性・規範意識の芽生え、(5)社会生活との関わり、(6)思考力の芽生え、(7)自然との関わり・生命尊重、(8)数量や図形、標識や文字な

どへの関心・感覚, (9)言葉による伝え合い, (10)豊かな感性と表現の10項目が示されている。これらは、幼児教育・保育の中で育まれるだけでなく、小学校以降の教科等の学びの基盤となり、体験活動や自己学習を進める中核の力として、授業への有能な参加を可能にする役割も担っている(無藤, 2018)。このように、「10の姿」は幼児教育と学校教育とをつなぐ「共通言語」としての機能を持ち、教育の連続性を支える視点として位置づけられている。

しかし、幼児教育と小学校教育は、他の学校段階等間の接続よりも教育内容や指導方法、生活の流れなどに多くの違いが見られ(文部科学省, 2024)、円滑な接続を図ることは容易でない。こうした課題に対応するため、文部科学省(中央教育審議会初等中等教育分科会、幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会)では2021~2022年度にかけて、5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」と称して焦点を当て、幼保小の連携を強化するプログラムの開発を進めた^(注2)。この取り組みでは、幼保小の関係者のみならず、家庭や地域、自治体などが連携・協働することの重要性が強調されており、子どもの育ちを支える社会的な基盤づくりが求められている(文部科学省, 2023)。

このような背景から、円滑な幼保小接続を実現するためには、関係者が「10の姿」への共通理解を持ち、それを具体的に捉える視点を共有することが不可欠である。しかし、こうした違いを客観的に捉えることは容易ではない。なぜなら、「10の姿」は子どもの育ちゆく姿を表現したもの(到達目標ではなく方向目標)であり(汐見・中山, 2019)、定量的な評価指標が明確に定められているわけではないからだ。これまでの取り組みでは、保育者の語りや記録を通じた理解の共有が中心に行われてきたが、これは主観的な解釈に依存する傾向があり、比較可能性や再現性に課題が残されている。このような課題を踏まえ、「10の姿」の研究を進めるうえでは客観的かつ量的に捉える方法が求められている。

また、「10の姿」は全国共通のものとして示さ

れている一方で、具体的な教育・保育の内容や方法は各施設の裁量に委ねられている点に留意する必要がある。たとえば、幼稚園教育要領の前文には「また、各幼稚園がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、幼児や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、幼児教育要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である」(文部科学省他, 2017, p.5)とあり、保育所保育指針の第1章総則には「各保育所は、この指針において規定される保育内容に係る基本原則に関する事項等を踏まえ、各保育所の実情に応じて創意工夫を図り、保育所の機能及び質の向上に努めなければならない」(文部科学省他, 2017, p.26)と記されている。このように、「10の姿」の表れ方は園の方針や環境によって異なる可能性がある。そこで、本研究では認可保育園と森のようちえんを対象とした比較を行い、10の姿の可視化を試みる。なお、本研究対象である森のようちえんは、認可外保育施設であるが、保育所保育指針には認可外保育施設においても、保育所保育指針の内容に準じて保育を行うことと定められている(文部科学省他, 2017)。また当該施設の保育者も「10の姿」を理解したうえで子どもたちに関わっていた。そのため、森のようちえんの子どもの姿を捉えるものとしても有用だと考えた。

日本の森のようちえんは、「年間を通して、森や野原、里山など自然豊かな場所で、0歳から10歳ぐらいの子どもを保育する活動、および、その活動を実施する幼稚園・保育所、諸団体」(今村, 2011, p.62)と説明される。こうした自然豊かな場所での保育はヨーロッパに起源を持つ。Rosengren (2018 ヴィンスルー・村上訳 2020) はデンマークにおける森のようちえんの歴史に触れており、「デンマークで最初に作られた『森のようちえん』は、エラ・フラタウの『歩く幼稚園』です。1952年に彼女が自分の子どもと一緒に森の散策を始めたところ、その活動に関心を持った隣人や知り合いが、次第に自分の子どもを彼女と一緒に森の散

策に送り出すようになったのです。」(p.22)と記している。また、石亀(1995)はデンマークのグラドクサ森の保育園^(注3)を紹介しており、森の保育園の設立の目的を「子どもに自然を体験させる。森の動物や植物を尊重しつつ自然と交わらせる。観察力をつけさせる。子どもの運動力、感覚、言葉、創造力、自律性、協調性を育てる。これらの発達の可能性は、それぞれの子ども自身のテンポを基にする。」(石亀, 1995, p.58)と述べている。こうした森のようちえんはデンマークだけでなくドイツでも広がっている。ヘフナー(2009)がドイツで行った、森のようちえんと正規の幼稚園の卒園児の小学校での修学状況に関する調査では、「動機づけ・忍耐・集中」「社会的行動」「授業中の協働」の因子で、森のようちえんの卒園児は正規の幼稚園児よりも高く評価されることを明らかにした。ただし、この調査の回答者は小学校教諭であり、結果の解釈には注意が必要である。

上記のような、認可保育園と森のようちえんの子どもたちの比較研究は日本でも行われている。例えば安久津他(2020)は、認可保育園および森のようちえんに通う年長児49名を対象に、自由遊びの映像記録と保育者への半構造化インタビューを通じて、10の姿の表出を質的に検討した。その結果、認可保育園では「豊かな感性と表現」「思考力の芽生え」などが、森のようちえんでは「健康な心と体」「自然との関わり」が顕著に観察された。しかし、分析対象が各園1事例に限定されており、短期間の観察であったことから、結果の一般化には限界がある。

大谷(2023)は、全国の日常型森のようちえんの保育者を対象とした質問紙調査の結果を既存園^(注4)と比較することで「学びに向かう力」の育ちに影響する要因を検討した。その結果、森のようちえんの子どもは既存園と比べて好奇心・自己主張・がんばる力の育ちが顕著であり、その背景には自然環境を通じた主体的な遊び経験と、保育者が子どもを主体者として尊重する関わり方があり、受動的な一斉活動は学びに向かう力に負の影響を及ぼす可能性があると考えた。ただし、こ

の結果は保育者の回答に基づくものであり、子どもの行動に基づく分析は行われていない。

そこで、吉澤他(2021)は認可保育園と森のようちえんの子どもたちの遊び場を撮影した評価映像を作成し、熟達保育士3名が評価者となって、各場面での10の姿を評価することを試みた。そして、森のようちえんの子どもたちは認可保育園の子どもたちよりも「健康な心と身体」や「自然との関わり・生命尊重」がより多く見られると報告した。しかし、「10の姿が表れていると思った行動を任意でカウントする」という手法がとられていたため、評価者ごとに評価のタイミングや回数に差が生じていた。

以上のように、「10の姿」は、幼児教育と小学校教育をつなぐ重要な視点でありながら、その具体的な表れ方は保育環境や実践によって異なる可能性がある。また、先行研究では質的分析や保育者の主観的評価に基づく検討が中心であり、子どもの実際の行動に基づく量的な分析は十分に行われていない。そこで本研究では、認可保育園と森のようちえんに通う子どもたちの自由遊びの様子を時間見本法により観察・記録し、「10の姿」の表出の特徴を量的に比較・検討することで、保育環境が子どもの姿に与える影響を客観的に捉えることを試みる。

なお、時間見本法(time sampling method)は子どもの描画行動に関する先行研究(千川他, 2008)でも客観的に評価できる定量的手法として用いられている。そのやり方について、松浦・西口(2008)の記述を一部参照する。まず、対象となる人物を観察し、その様子を一定時間記録するという一連の手続きにおいて、最小作業時間を設定し、これを「1単位」と見なす。そして、この「1単位」に相当する観察および記録の時間を事前に定め、それに基づいて作業を行う。記録の際にはチェックシートを作成しておくことが望ましく、一般的には1/0サンプリングと呼ばれる記入方式が用いられる。この方式では、ある行動が生じた場合には「✓」や「○」などの記号で1点として記録し、生じなかった場合には空欄また

は「×」で記録する。

2. 方法

2-1. 研究対象

本研究の対象は、中国地方のA町に所在する認可保育園および森のようちえんの5歳児クラスである。認可保育園はA町が設立した公立の保育園である。一方、森のようちえんは特定非営利活動法人が運営し、3～5歳児を対象に平日（週5日）通園の保育を行っており、A町内にある森を中心にした自然活動のフィールドを有している。

2-2. 調査手順

(1) 観察映像の撮影と分析場面の抽出

2021年9月から11月にかけて、両園で実施された複数の活動を観察対象とし、1名の撮影者が1台のカメラを用いて撮影した。撮影された約6

時間分の映像から、第1著者および第2著者による合議を経て評価対象となる場面を抽出した。評価用映像を4つの区分（2園×2活動）に編集し、各区分はさらに2場面（各約5分）に分割した（表1）。場面の切り替えを明示するため、各場面の冒頭には5秒間の黒画面を挿入した。

(2) 時間見本法の設定

1評価単位は30秒とし、前半20秒を観察時間、後半10秒を記録時間とした（図1）。1場面あたりの評価単位数は9～11（平均10）であり、映像中の観察時間と記録時間の切り替えタイミングで合図音を挿入した。

(3) 評価方法

本研究で用いた評価表の横軸には「10の姿」を、縦軸には評価単位を配置した。幼児教育の専門家3名が、各評価単位で観察されたと思われる「10の姿」を記録した。複数の姿が同時に観察される

表1 各場面の説明

評価用映像名（区分）	概要
認可保育園：森遊び	認可保育園の子どもが行った森遊び 場面1：横たわった木材を動かそうとした。 場面2：落ちていた木を使ってシーソーを作った。
認可保育園：室内遊び	認可保育園の子どもが行った室内での工作遊び 場面1：ボール転がし用の台を工作した。 場面2：的あて用の「的」を工作した。
森のようちえん：森遊び	森のようちえんの子どもが行った森遊び 場面1：川の中から何かを探していた。 場面2：細い竹を何かに使えないかと試行錯誤した。
森のようちえん：朝の会	森のようちえんの子どもが行った森遊び 場面1：東屋での朝の会に参加した ^(注1) 。 場面2：野イチゴ摘みをした。

(注1) 本研究対象となった森のようちえんには、預かり保育拠点の外に「東屋」があり、そこで朝の会を実施している。登園した子どもたちは拠点の内外で自由に遊んでおり、この「朝の会」もそうした遊びの延長に位置づけられている。

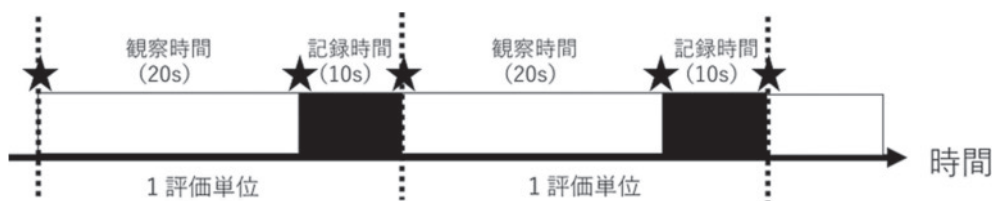


図1 評価の流れ

注) 合図音のタイミングを★で表した。

time	健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然とのかかわり・生命尊重	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現	該当なし
記入例											
0:05	◎								○		
0:35											○
1:05				○		◎					
1:35								○			

図2 評価表の記入例

可能性を考慮し、該当する「10の姿」の項目すべてに○を記入し、特に顕著な項目には◎を記入した。さらに、映像の乱れなどで評価が困難な評価単位は「該当なし」の項目へ○を記入した(図2)。

(4) 倫理的配慮

本研究は美作大学の研究倫理審査を経て承認を得ており、実施前に各園の保護者および職員に対して事前説明を行い、同意を得た。

3. 結果

3-1. 評価結果の得点化

各評価者の評価結果は、◎を2点、○を1点として得点化した。各評価単位について、記入された○が1つだった箇所については、その○を2点として得点化した。評価単位あたりのチェック数に制限を設けなかったため、評価者や場面によってチェック数に差が生じた可能性がある。そこで、総チェック数に対する場面×評価者のカイ二乗検定の結果、有意差は認められなかった($\chi^2 = 0.23, df=6, n.s.$)。したがって、次項の分析では3名の評価者の合計値を用いた。

3-2. 場面ごとの10の姿の特徴

各場面において、「10の姿」の各総得点が全体に占める割合(観察割合；%)を算出した。図3は、各場面における「10の姿」それぞれの観察割

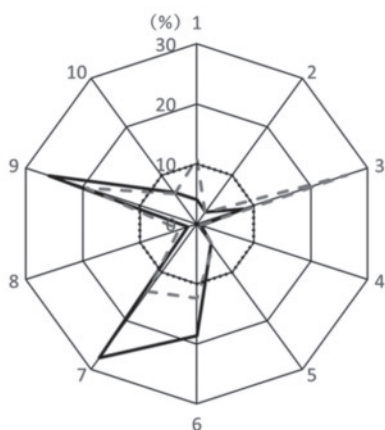
合を示したレーダーチャートである。観察割合は、各「10の姿」の総得点が全体に占める比率として算出されており、全体で100%となるように調整されている。したがって、ある項目の割合が高い場合には、当該場面においてその姿が相対的に多く表出していたと評価され、割合が低い項目は表出頻度が少ないと評価されたことを意味する。ただし、図3は各「10の姿」の表出傾向のバランスを可視化するものであり、観察割合の大小がその姿の発達の程度や教育的価値を直接的に示すものではない点に留意する必要がある。なお、各「10の姿」が均等に観察された場合の理論値(10%)を基準として、図中に点線で示している。以下に各図の所見を示す。

認可保育園(森遊び)：「6. 思考力の芽生え」「7. 自然とのかかわり・生命尊重」「9. 言葉による伝え合い」が顕著に観察評価された。場面2では「3. 協同性」も顕著であり、「4. 道徳性・規範意識の芽生え」は両場面で観察評価されなかった。

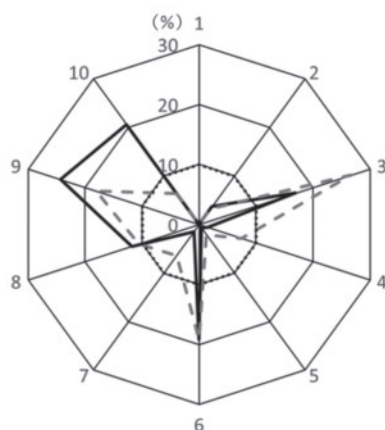
認可保育園(室内遊び)：「3. 協同性」「6. 思考力の芽生え」「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」が顕著であり、場面1では「10. 豊かな感性と表現」も観察評価された。一方、「1. 健康な心と体」は両場面で観察評価されなかった。

森のようちえん(森遊び)：「7. 自然とのかかわり・生命尊重」「9. 言葉による伝え合い」が顕

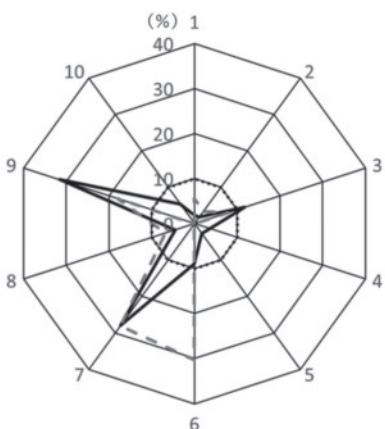
認可保育園：森遊び



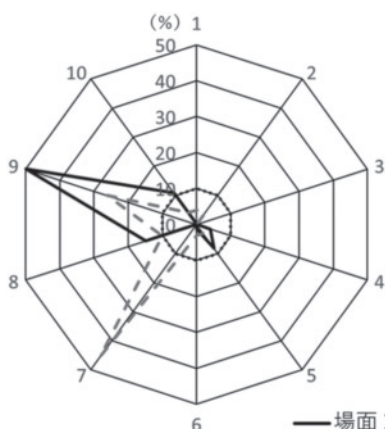
認可保育園：室内遊び



森のようちえん：森遊び



森のようちえん：朝の会



【10の姿】

- 1. 健康な心と体、2. 自立心、3. 協同性、4. 道徳性・規範意識の芽生え、5. 社会生活との関わり、6. 思考力の芽生え、
- 7. 自然との関わり・生命尊重、8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、9. 言葉による伝え合い、10. 豊かな感性と表現

— 場面1
- - 場面2

図3 「10の姿」の観察割合 (%)

著であり、場面2では「6. 思考力の芽生え」も観察評価された。すべての評価単位において、1つ以上の「10の姿」が観察評価された。

森のようちえん（朝の会）：「9. 言葉による伝え合い」が最も顕著であり、場面1では「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「10. 豊かな感性と表現」、場面2では「7. 自然とのかかわり・生命尊重」が観察評価された。

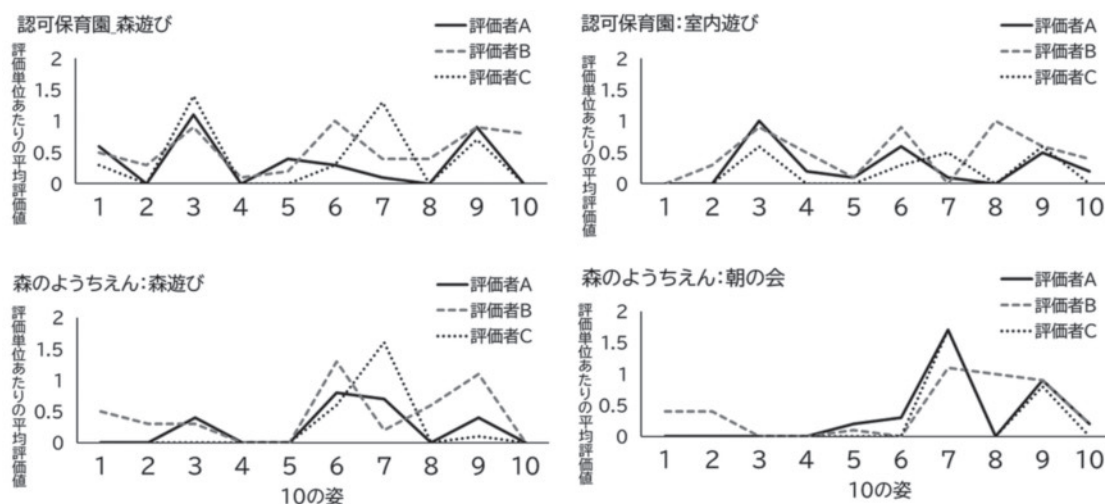
3-3. 評価者間の傾向

評価者間のチェック数に有意差はなかったが、各評価者のチェックの傾向には違いがあったのだろうか。この点を確認するため、各区分の場面2を対象として、評価者ごとに全評価単位の平均

チェック数（0～2個）を算出し、場面ごとの分布の傾向を折れ線グラフで示した（図4）。3本の折れ線グラフ（評価者A～C）について、山と谷の形状が一致する「10の姿」は評価者間で共通の認識があるものと考えられ、形状が異なる「10の姿」は評価者間の認識に違いがあることを意味する。所見として、特に「3. 協同性」では評価者間のズレが小さく、「7. 自然とのかかわり・生命尊重」と「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では評価者間のズレが大きく見えた。

4. 考察

本研究では、時間見本法を用いて、認可保育園



【10の姿】

1. 健康な心と体、2. 自立心、3. 協同性、4. 道徳性・規範意識の芽生え、5. 社会生活との関わり、6. 思考力の芽生え、
7. 自然との関わり・生命尊重、8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、9. 言葉による伝え合い、10. 豊かな感性と表現

図4 各区分（場面2）の評価者ごとの評価結果分布の傾向

および森のようちえんにおける子どもの活動を観察し、「10の姿」の表出を量的に分析した。その結果、保育環境や活動内容によって、観察される姿に違いがあることが明らかとなった。

まず、認可保育園の室内遊びでは「3. 協同性」「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「9. 言葉による伝え合い」などが多く観察され、構造化された環境が子どもの社会的・認知的な側面を促進している可能性が示された。一方、森のようちえんの自然活動では「7. 自然とのかかわり・生命尊重」「1. 健康な心と体」などが顕著であり、身体性や環境との関係性を重視した保育が、子どもの感覚的・身体的な育ちを支えていることがうかがえる。

また、活動内容によっても「10の姿」の偏りが見られた。創造的・対話的な活動では「9. 言葉による伝え合い」や「10. 豊かな感性と表現」が多く評価され、子ども同士の関わりや表現の機会が「10の姿」の表出に影響を与えていると考えられる。一方で、「4. 道徳性・規範意識の芽生え」や「1. 健康な心と体」など、一部の「10の姿」は特定の場面では全く観察評価されなかった。これは、活動の性質や評価者の視点によって、「10の姿」の捉え方に偏りが生じる可能性を示してい

る。

さらに、評価者間の傾向を分析した結果、同じ場面であっても、評価者によって観察評価される「10の姿」が異なる場合があることも明らかとなった。特に「7. 自然とのかかわり・生命尊重」や「8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」などは、評価者間でばらつきが大きく、評価者の認知的な癖や視点の違いが影響している可能性がある。言い換えると、保育者間で「10の姿」に対する理解やイメージが異なることを指摘する結果であり、共通理解の形成や省察の機会が重要であることを示している。

加えて、1場面に複数の子どもが映っているシーンがあり、評価者が注目した対象によって評価結果が異なった可能性もある。今後、より精緻な分析を行うためには、個別の子どもに焦点を当てた撮影や評価が求められる。これにより、個々の子どもの育ちをより正確に捉えることが可能となり、保育実践の改善や教育的支援に有用な知見が得られると考えられる。

本研究にはいくつかの限界が存在する。第一に、評価対象となった映像は限られた時間・場面に基づいており、活動の多様性を十分に反映したものとは言い難い。第二に、1場面に複数の子ども

もが映っていたため、評価者が注目した対象によって評価結果が異なった可能性がある。第三に、評価者は「10の姿」に関する専門的知識を有しているものの、評価基準の統一や訓練は行っておらず、主観的な判断が含まれる可能性がある。今回は評価者のズレを検討するために評価基準を明示しなかったが、これらの点を踏まえながら、結果の解釈や一般化についての議論をする必要がある。

一方で、本研究は「10の姿」の量的可視化を試みた点において、先行研究に対する方法論的な新規性を有している。特に、時間見本法を用いて複数の保育環境における子どもの姿を比較したことで、保育実践の違いが子どもの育ちに与える影響を客観的に捉える際の参考となりうる。また、評価者間の傾向分析を通じて、保育者の認知的視点の違いや省察の必要性を明らかにした点も、保育者研修や教育実践の改善に貢献できる。さらに、本研究の成果は、保幼小接続における教育的連続性の検討や、保育者間の共通理解形成に向けた実践的な手がかりとなるだろう。

5. 結論

以上、本研究では、時間見本法を用いて異なる保育環境における子どもの活動を観察し、「10の姿」の表出を量的に比較分析した。結果から、保育環境や活動内容、評価者の視点によって表出する姿に違いがあることが明らかとなり、「10の姿」の捉え方には主観的な要素が含まれる可能性が示された。今後は、より精緻な観察手法や評価基準の整備を通じて、子どもの育ちを客観的かつ継続的に捉える枠組みの構築が求められる。

6. 謝辞

本研究にご協力をいただきましたA町の認可保育園と森のようちえんの園児・保護者ならびに保育者の皆様と、ビデオによる観察評価にご協力をいただきました3名の先生方に感謝いたしま

す。

7. 後注

1. 本研究は科研費(21K02397)の助成を受けた。
2. 文部科学省「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 開催状況」の議事録を参照した。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/086/giji_list/index.htm
3. 石亀(1995)によると、「この森の幼稚園は、現地では森の保育園と呼ばれていますが、日本流に言うと、幼稚園と保育園の両方の性格を持った組織、あるいはその中間の組織ということになります。」(p.58)とある。
4. 大谷(2023)では、調査項目および既存園との比較として、ベネッセ教育総合研究所(2019)が発表した「第3回幼児教育・保育についての基本調査」の結果のデータを用いたと書かれている。しかし、第1著者が引用文献を確認したところ、ベネッセ教育総合研究所(2016)の「園での経験と幼児の成長に関する調査」の質問項目および結果も参照したと推測される。

引用・参考文献

- 安久津太一・藪田弘美・前川真姫・市川智之・藤田裕之・壽谷静香(2020)。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に働きかける幼児の自由遊びの観察と評価 岡山県立大学教育研究紀要, 4, 11-20.
- 石亀泰郎(1995). 森のようちえん 宝島社.
- 今村光章(2011). 森のようちえんとは何か——用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐって—— 環境教育, 21(1), 59-67.
- 大谷彰子(2023). 森のようちえんの学びに向かう力の育ちに影響を与える要因:園での経験, 保育者のかかわりに焦点を当てて 自然保育学研究, 5(1), 1-10.
- 汐見稔幸・中山昌樹(2019). これからの保育シリーズ⑦:10の姿で保育の質を高める本 風鳴舎.
- 千川文子・比留間伸行・多田好克(2008). 幼児の紙とコンピュータでの描画比較に関する定量的な行動分析 デザイン学研究, 55(3), 37-44.
- ベネッセ教育総合研究所(2016). 園での経験と幼児

- の成長に関する調査. https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_4940.html (2025年9月5日閲覧)
- ベネッセ教育総合研究所 (2019). 第3回 幼児教育・保育についての基本調査. https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_5444.html (2025年9月5日閲覧)
- ヘフナー, P. (佐藤竺訳) (2009). ドイツの自然・森の幼稚園：就学前教育における正規の森の幼稚園の代替物 公人社.
- 松浦均・西口利文 (2008). 第1部第2章 観察の手法 松浦均・西口利文 (編) 観察法・調査的面接法の進め方 (pp.12-16) ナカニシヤ出版.
- 無藤隆 (2018). 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 東洋館出版社.
- 文部科学省・厚生労働省・内閣府 (2017). 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本) チャイルド本社.
- 文部科学省 (2023). 学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について ～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～ https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji-1258019_02.pdf (2025年8月18日閲覧)
- 文部科学省 (2024). 幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと? https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/mext_02697.html (2025年9月20日閲覧)
- 吉澤英里・藪田弘美・前川真姫・安久津太一 (2021). 森のようちえんの遊びで観察される「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の特徴——認可保育園との比較に基づく一考察—— チャイルドサイエンス, 21, 58-61.
- Rosengren, R. (2018). *Child of nature: Benefits of nature in childhood*. Forlaget Blue Pearl. (リッケ・ローセングレン著 ヴィンスルー美智子・村上進訳 (2020). 北欧の森のようちえん 自然が子どもを育む——デンマーク・シュタイナー幼稚園の実践—— イザラ書房).

An Attempt at Quantitative Visualization of the Ideal Image by the End of Childhood: A Study Using the Time Sampling Method.

YOSHIZAWA Eri YABUTA Hiromi MAEKAWA Maki

Abstract

Using the time sampling method, this study visualized Ideal Image by the End of Childhood by observing and recording 5-year-old children's free play in a licensed nursery school and forest kindergarten; further, frequencies of each exhibited ideal image were compared, with notable differences based on the childcare environment and activity. In the licensed nursery school, Cooperativity; Interests in and sensitivity to quantity, figures, signs, and letters, etc.; and Mutual verbal communication were common, indicating that structured environments can promote social and cognitive development. Meanwhile, in the forest kindergarten, Connection to nature and respect for life and Sound mind and body were prominent, in addition to notable physical and sensory aspects. Furthermore, inter-rater differences were found, indicating that understanding and perspectives of Ideal Image by the End of Childhood influenced the observed tendencies. These findings form shared understanding among childcare workers, thereby encouraging professional reflection, examining educational continuity during the transition from early childhood to primary education, and potentially improving childcare practices and assessment methods.

Keywords: Ideal Image by the End of Childhood, licensed nursery school, forest kindergarten, time sampling method, quantitative visualization.